

メンバー紹介

センター長

佐久間 淳一

センター長、教授／兼任

言語学、特に統語論。フィンランド語、エストニア語を主な対象に、文の情報構造と語順など統語事象との関係を研究。

研究戦略部門

河江 肖剰

教授／専任

エジプト考古学。3D計測とAI解析によるピラミッド構造研究、および古王国時代の住居址発掘を通じた国家・社会構造の研究。

坂本 将暢

教授／専任

授業分析、分析方法の開発及びそのためのソフトウェア開発、教師の授業技術に着目した職業教育。

浦田 真由

准教授／兼任 本務先：情報学研究科

専門は、情報社会設計論、社会情報学、観光情報学。デジタル技術の社会実装により、だれもが暮らしやすい新しい社会をデザイン。

林 秀弥

教授／兼任 本務先：法学研究科

法学、特に経済法・情報法。内外のデジタル政策について法学の観点から研究を進めている。現在、日本学術振興会学術システム研究センター主任研究員として、学術振興政策全般にも関わる。

川本 悠紀子

准教授／専任

西洋古典学、西洋古代史、建築史。主に共和政末期から帝政初期に書かれた文学作品や史料にみられる古代ローマ時代の表象文化。

園田 正

教授／専任

農家行動の実証分析、農業・製造業の生産性分析、上記に関係するミクロ計量経済学的手法。

染矢 将和

教授／兼任 本務先：国際開発研究科

開発途上国（主にイラクやエジプトといった中東諸国）の金融・財政政策を確率的動学一般均衡モデルにより分析。

日比 嘉高

教授／兼任 本務先：人文学研究科

私小説、モデル小説を中心とした日本近現代文学研究。移民文学研究。出版文化研究。デジタル・ヒューマニティーズと文学研究、文化批評。

研究プロジェクト部門

岩田 直也

准教授／専任

西洋古代哲学、プラトンとアリストテレスを中心とする認識論と形而上学。AI・デジタル技術を用いた古典思想と人文学の新展開。

須田 永遠

特任准教授／専任

20世紀フランス文学、ピエール・クロソウスキー。情報系技術を紹介した文学・思想研究と、技術開発のための人文社会知の活用。

光永 悠彦

准教授／兼任 本務先：教育発達科学研究科

教育測定学、心理統計学。データ解析手法を用いた心理・教育における大規模テストの機能充実化に関する実践的研究。

佐野 智也

講師／専任

法情報学、デジタルアーカイブ。情報技術を応用した法令データベースの構築と立法沿革・法制度史の分析。

木越 義則

教授／兼任 本務先：経済学研究科

アジア経済史。19世紀から20世紀初頭にかけてのアジアの経済発展について、貿易と海運からアプローチしています。

三輪 晃司

准教授／兼任 本務先：人文学研究科

心理言語学、単語認知、バイリンガルの言語処理、アイトラッキング、書記体系。

生駒 流季

学術専門職

学術論文、データベース、ツール、ソフトウェア、およびそれらのカタログなどのデジタル学術リソースの取得と利活用。

柳井 明日香

事務補佐員。

デジタル×
人文社会科学で
知の新時代を切り拓く

名古屋大学
デジタル人文社会科学
研究推進センター

Center for Digital Humanities and Social Sciences

名古屋大学 デジタル人文社会科学研究推進センター

〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町 法経共用館 1階
代表電話番号：052-789-2369

<https://dhss.nagoya-u.ac.jp>



ひらかれた、 新しい知の融合を目指して

～デジタル人文社会科学研究推進センターの目指すもの～

2024年に発足した
名古屋大学デジタル人文社会科学研究推進センター。
デジタル人文社会科学研究が社会に貢献するためのキーは何か。
佐久間 淳一センター長に話を聞いた。



センター長 佐久間 淳一

センター設立の狙いと計画

名古屋大学は、産業集積地である名古屋に立地するという地域的な理由もあり、理工系、特に産業につながる研究がどうしても注目されがちです。それに対して、人社系の研究力向上を図る。それも、教員個人だけではなく、名古屋大学の5つの人社系の研究科が横断的に研究を展開できる枠組みをつくるということがはじまりです。人文社会科学分野を横断的につなげ、理工系や産業とも融合する、そのためにデジタルデータを駆使する。つまり、デジタル・ヒューマニティーズ (DH) を拡張したデジ



タル人文社会科学をコアとして、理工学系のみならず社会実装へとつなげる組織をつくる。ひとくちに言えばそうなります。

教員個人同士の共同研究だけではなく、センターをつくることでより広く強固な組織的な研究基盤を形成することが狙いです。ひとまずの計画は、5年です。2024年にはじまったので、2028年度末までに一定の成果を出すべく、

活動をしています。

デジタルデータを使った研究自体は人社系の教員の間でも既に活発にされています。ただ、個別にやってもその取り組みは外から見えにくく、人文社会学の研究力向上という大きな目標は達成できないのではないか。

DHといえば人文系ですが、本センターでは、社会科学、つまり法学、経済学、教育学などを含めてデジタル人文社会科学と言っています。理工系との連携も視野に入れていますが、まずは人文系と社会学系が連携することが必要です。デジタルデータを駆使した横断的な研究が期待されますが、実際に分野横断ということになると簡単なことではありません。DHを越えてデジタル人文社会科学という複合的な研究領域を提唱し推進する試み自体が、国内はおろか国外でも類を見ない挑戦であり、そのチャレンジの場として本センターは機能したいと考えています。

本センターができたことで部局をまたいで頻繁に集まり、会議だけではなくざっくばらんな意見交換が行える機会も日常的に増えてきました。個別の研究についてはもちろん「デジタル人文社会科学にはなにができるか?」「社会とつながるにはどうしたらよいのか?」などの大きな視野での議論も活発です。こうしたことは、上からの押し付けではうまくいきません。部局の先生の自由なアイデアを積極的に取り入れ、学外も含めてセンター外の先生も巻き込んでいく。センターだけで閉じることなく、プロジェクトを育てていきます。

デジタル人文社会科学には、 なにができるか

近年盛んなデジタル・ヒューマニティーズに関して、私の専門である言語学ではどのようにアプローチしているかをひとつ具体的にお話ししましょう。言語学は主としてテキストデータを扱います。テキストデータはデジタル化しやすいため、言語コーパスの構築を通して、比較的早くからデジタルデータを活用した研究が進められてきました。言語学は世界中の言語に共通する原理を明らかにしようとしています。大規模なデジタルデータが使えるようになったことは大きな武器となりました。

言語に関心を寄せているのは言語学だけではなく、情報工学の世界でも盛んに自然言語処理の研究が進められてきました。ここに言語学と情報工学の接点が生れます。ただし、20世紀後半以降の言語学を牽引したチョムスキーと情報工学の研究者は必ずしも同じ方向を向いていたわけではありません。なので、チョムスキーが考える人間の能力とAIの基盤となっているLLMは別物です。

しかし、とにもかくにもLLM、そしてAIが急速に進化したことは確かです。その進化は、言語学者だけでなく、情報工学系の研究者の想像をも超えたものだったかもしれません。少なくとも言語学者は、自在に言語を操るAIを目の当たりにして困惑しています。人間の想像を超えて進化するAIが社会実装されつつある状況にどう向き合っていけばいいのか?

これは言語学だけの問題ではありません。これだけ発達したAIを活用しない手はありませんが、人間とAIの関わり方については、多面的な議論が必要です。この議論には、人社系の様々な分野の研究者が参加し得るのではないでしょうか。そして、それが、人社系の諸分野が交わる契機となり、社会的課題との接点も生まれます。例えば、多分野との協働を視野に入れたセンターのHumanitextプロジェクトは、AIを活用しつつ、AIの偽情報生成問題に対処する取組みになっています。

もちろん、人社系の研究と社会課題が交わるのはAIをめぐる問題だけではなく、また、デジタル人文社会科学が扱うデジタルデータはテキストデータだけではなく、数値データはもちろん、画像であれ音声であれデジタル化されたデータはすべて対象です。デジタル・ヘリテージ・プロジェクトでは三次元データを扱っています。テキスト以外のデータを積極的に扱っていることは、本センターの特徴のひとつですが、多様なデータを扱うことは、分野間の連携や社会課題へのアプローチにも多様性をもたらすものと考えています。

センターからの発信が社会実装のキー

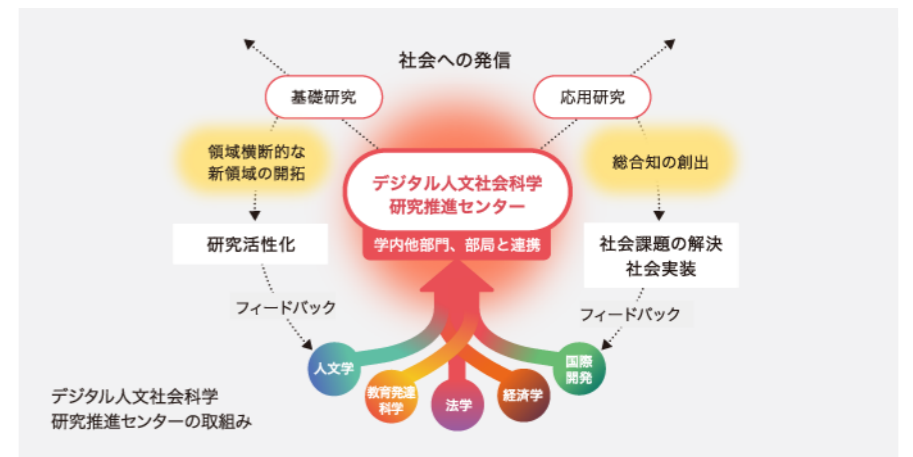
本センターでは人社系の研究と現実社会との関係性を重視しています。ただし、人社系の研究成果が直ちに社会貢献や社会課題の解決につながるとは限りません。人社系の研究と社会との関係性をもっと複雑で、必ずしもわかりやすいものではないからです。しかしだからこそ、研究者自身が何かの役に立つとは考えていなかったことが、実は社会から見るとおもしろいとか使えるとか、そういうことも起こり得ます。

もちろん、どういう研究を行っているかが知られていなければそういうことも起こり得ないので、研究が外にひらかれていることはとても重要です。そのためには積極的に発信して、つながりをつくり、それをきっかけにさらに関係を広げていく。センターの先生個人の連携だけでなく、センターとして発信を強化することで、組織としての協業環境をつくっていきたいと考えています。



発信力の強化 各種イベントの開催

本センターではシンポジウムや研究会をはじめ、ランチタイムセミナーや共催イベント、ワークショップなどを積極的に行っています。2025年からはオープンな討論参加型イベント『DHSSコロキウム』も開催。今までのイベントの一部はDHSSのYouTubeでもご覧いただけます。イベント情報は随時センターウェブサイトにて告知いたします。



学生へ

ひらく、広げていくという意味では、センターの先生、学内・学外の先生など、既に研究者となっている方々との協業が基盤となるのはもちろんですが、研究者を目指している学生もその輪の中に入れていきたい。デジタル人文社会科学という新しい学問の発展には、若い学生自由な発想が必要です。

そうした考えから、センターでは、2025年秋から大学院生向けに「デジタル人文社会科学教育プログラム」を開始することになりました。学生が参加できるイベントも活発に行っていますので、ぜひ多くの大学院生に参加してもらいたいと思います。

外にひらくセンターを目指して

先ほど来お伝えしているように、センターの設置目的を果たすためにはセンターがひらかれたものでなければなりません。色々な分野のひとが、日常的に意見交換できる場であることが重要です。

産業界との連携については、既にいくつかお話をいただいています。企業の方でも、これからの技術開発にはやはり文系の知を取り入れていかなければいけない、という認識が広がってきています。技術開発や産業との接点で人文社会科学の知をどのように活用していくかをともに議論していきたいと考えています。

人社系の知の中枢概念がデジタルデータによって拡張されることがデジタル人文社会科

学の本質です。センターでは、理工系を含め、多様な学問領域と連携し、社会や産業界とも向き合う中で、人社系の知を社会実装していく、そうした新しい知のありようを目指しています。法令のデータベースをめぐる法学と情報学の協働、歴史文献に残るオーロラの記録をめぐる歴史学と理学の連携など、部局をまたいだ様々な研究が既に動き出していますが、今後はさらに多くの学際的研究が行われていくことでしょう。



デジタル人文社会科学と言った時、人文学と社会科学では研究手法が異なるため、両分野の連携だけでも挑戦的な取組みです。しかし、私たちは、さらにその先を目指しています。議論を重ねることで、人社系を核とした、新たな学際的な研究の具体的なモデルを提案していきたい。そして、その成果を積極的に発信することで、産学連携や社会課題の解決、文系の知の社会実装につなげていく。デジタル人文社会科学研究推進センターは、そうした活動を強力に推進することで、新時代にふさわしい人社系の先端的研究拠点を目指します。